

STAGE 4

説明的文章（人文科学）

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

1 日本語については、とかく、主語がはっきりしなくて曖昧とか、述語が最後にくるので言いたいことが分からないとか、あれやこれやと議論が絶えない。だが、私は、日ごろからそれらを、¹的外れもはなはだしい擬似問題だと思っている。それどころか、そのように問題とされるところにこそ、日本語の最も論理的な部分があるとさえ考えているのである。唐突な質問ではあるけれど、手紙の宛名の書き方は、はたして日本流と西洋流とどちらがすぐれているだろうか。そう、私たちは「〇〇県」「〇〇市」「〇〇町」「〇〇丁目」「〇番地」という形で、⁽¹⁾大きなカテゴリーから次第に小さなものへと限定し、最後に個人の名前をもってくるが、西洋ではこれが逆になるというあの書き方である。いかがだろう。私は、²まぎれもなく日本流が理にかなっていると感じるし、そのことは、実は、多くのフランスの友人たちも認めているところなのだ。

2 日本語の主語・述語と呼ばれるものの働きは、まさにこの宛名書きの形式に一致する。ために、主語をめぐる議論で有名になった「象は鼻が長い」の一文を考えてみよう。そもそも日本語に主語という概念がふさわしいかどうかを検討せずに、「象は」が主語か「鼻が」が主語か、など論じることがやめにして、今は、この表現の論理展開だけに注目していただきたい。まずこの表現は、「象は」と言って、語るべき主題を提示し、さらにこの主題のなかで「鼻」を限定することによって、順次、その内実を語っていく。つまり、日本語の論理プロセスも、基本は宛名書きと同じく、大きなカテゴリーから次第に小さなものへと絞りこんでいくスタイルなのである。

3 こうした日本語の発想はすぐれて「探索的」かつ「発見的」なものとなる。なぜならそれは、私たちの内部で初めは漠然としていたものが、次第に明らかに becoming プロセスを正確にたどっているからだ。当初は何もないところから、にわかに一つの意味が姿をとり始める。それを私たちは「は」という表現により、かなり、⁽²⁾大ざっぱな一領域として設定する。そしてこの領

域がひとたび決まれば、今度はそこに「は」という表現があらわれてその領域をさらに細かく限定する。この限定されたものは、さらに次の表現によって限定され、それはまた……と続いて以下同文。最後には、見事に彫琢された結論が得られるというわけである。

4 とりわけ、このプロセスにおける最初の「は」という表現などは、日本語の特徴をきわだたせるものであるとともに、単なる言語学的な視点をこえたところで、豊かな思想的意味を³かいま見せてくれもする。通常、学校文法では「は」「が」「も」などの格助詞をしたがえるものを「主語」といってはばからない。しかしながら、「佐藤はもうとつてくに来ているけれど、鈴木はまだ見ていないなあ」というような場合、⁴「鈴木は」の部分の主語と呼ぶわけにもいかないだろう。そこで国語学者たちは、「は」という表現に「提示」といった定義を与えて、決着をつけたように思いこむ。そして思いこんで安心し、「は」のもつ⁵認識論的な重要性をすっかり見のがしてしまうのである。

5 あたりまえのことながら、私たちはつねに世界のなかで生き、そこであれやこれやの関心をもちながら、世界とさまざまな関係をとり結んでいる。私たちが、べつにこれといった注意もはらわなければ、世界は、⁽³⁾ぼんやりとしたまどろみのなかにあるのだが、ひとたびそのどこかに注意を向けるならば、とたんに世界も、それに応じた表情を見せるようになってくる。したがって、世界と私たちとは表裏の関係にあると言っていいたいだろう。

6 こうした世界のただなかにあって、私たちの前には、いつも一つの「知覚野」と呼ばれる意識の領野が広がっているのだが、ここに、ある時ふいに、曖昧模糊としたうながしのようなものが生じてくる。このうながしは、少しずつ意識化のプロセスをたどり、それが次第に形をとって、ついには命名というレベルにまで達することになる。そこで私たちは、「は」という言いまわしによって、言語表現への決定的な第一歩を踏み出すことになるわけだ。つまり、やや大げさな物言いを許していただけるならば、「は」には、

西洋語の主語にはない「知覚」から「言語」への移行が表現されている。まさしくこれこそが、西洋語には見られない「は」のもつ認識論的な重要性なのである。

⑦ この決定的な一歩が踏み出されてしまえば、その後は、すでに述べたように、言語上での細かい限定作業が続けられるばかりとなる。思考するとは、結局、思考する領域を次第に画定し、いっそう明確化していくことにほかならない。このような明確化の歩みは、広範な領野から次第に絞りこまれていく以上、いながらにして「帰納的」であるはずだ。さらにまた、それが一個人の言葉によつてなされるものであれ、対話者の言葉を含むものであれ、いずれにしても共通の領野のなかで下位区分しようとするのだから、重ねられる言葉は「協調的」なものになるであろう。

⑧ これに対して西洋語の論理はどうなるか。「AはBである。なぜなら、はであり、はであるからだ」——こうした論理は、かならずや「既定的」「演繹的」「対立的」とならざるを得ない。それはすでに「AはBである」と言ったところで勝負がついているのであり、結論は、それが正しいか誤っているか、二つに一つしかないのである。つまり、このような西洋語の論理は、あらかじめ論者のなかで決着のついたことがらを戦わせるには好都合だが、日本語のように、探索し、帰納し、協調して、不確かなものから徐々に結論を創造してゆく論理にはなにくい。

⑨ その意味では、日本語の論理の方が、実は、はるかに「発見的」であり「創造的」なのだが、いかんせん、国際会議あたりで論争するうえでは分が悪い。さらにまた、日本語の論理は、私たちが「探索的」であればこそ、その全き論理性を発揮するものであるにもかかわらず、わが同胞には、不確かなものを不確かなまま放置して、いっこうに動じないふうもある。そのうえ、こうした風潮は、今や情報化社会の便利ツールの手をかりて、わが国に蔓延し始めており、日本語の論理など語るはおろか、あらゆる論理が破綻してゆく様相さえ呈しているのである。これは言語の問題ではありながら、言語の領域をはるかに越えた射程にまで広がっている。

(注) 彫琢文章などを最適な表現を求めて考え練り上げて、立派なものにする。

ること。

画定Ⅱ区切りをはっきりと定めること。

帰納Ⅱひとつひとつの具体的な事実を総合し、それから一般的な原理または法則を導き出すこと。

演繹的Ⅱ一般的な原理から特殊な原理や事実を推論すること。

全きⅡ完全な。

蔓延Ⅱ(よくないものの)勢いが盛んになってあちらこちらに広がること。

破綻Ⅱ成り立たなくなること。

線1「的外れもはなはだしい擬似問題だと思っている。」とあるが、筆者はなぜそのように思っているのか。その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 世界には国や地域の歴史、習慣に由来するさまざまな言語が存在し、そこに生きる人々の生活に密着している以上、ひとつの言語を取り上げて批判することは、その言語を使用している人間を批判することになるから。

2 筆者は日本人であり、生まれてからずっと日本語を使って生活をしているため、日本語に対する愛着は人一倍強いものがあり、その日本語の構造を否定的にとらえる議論に対して日頃から腹立たしく思っていたから。

3 そもそも日本語という言語は、主語がはっきりしないという点に大きな特徴があり、相手に自分の意志を直接的ではなく、遠まわしに伝えようとするところに、日本人の相手を思いやる国民性が凝縮されているから。

4 大きな漠然とした領域から、次第に小さなものへと絞り込んでいく日本語の論理の過程は、西洋語の論理に比べ、不確かなものから徐々に結論を創造していくという点ですぐれており、探索的、発見的であるから。

線2「まぎれもなく日本流が理にかなっている」とあるが、これに対し、西洋語の論理が日本語の論理に比べ、理にかなっていないことを述べているのはどの段落か。本文中の①～⑨段落から一つ選び、その段落番号を書きなさい。

□

1000

— 100 —

- 4 観察させる

- $$(\mathcal{H}^{\circ})$$

[illegible]

[]

- ## 4 主体

[]

とに気がないから

うとはしないから。

人はもっていないから。

のであるから。

こなさい。

- ないという点。

- という点。

- ていくという点。

- ないという点。

最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

- 3 国際会議
- 4 社会全体